

信毎俳壇

坊城 俊樹 選

田作やどの貌みてもしカソの眼
 (飯山市) 田中 琢雄

初鏡後ろ姿に帯ぼんと
 (安曇野市) 平 至行

偲ひつつ削除キー押す年賀状
 (佐久市) 町田ゆかり

群青の空へオプジェの枯木立
 (長野市) 西本 ゆき

寒晴や鉄錆の浮く引込線
 (松本市) 中村 百仙

目に見えぬものに縋りて老の春
 (飯綱町) 坂井 寿男

冬のにほひ袂に包み夜汽車行
 (佐久市) 大井 悦子

水神の小さき祠に小さき注連
 (南相木村) 猿谷 秀

またひとつ谷を越えゆく除夜の鐘
 (松本市) 滝沢征矢子

滝凍てて神の眠りの深からむ
 (松本市) 久我 綺乃

佳作

歌かるた帝も弾き飛ばされて
 (下諏訪町) 木口 碧

歳晩やもやもやもある胸の隅
 (飯綱町) 神谷 晋

一句目、田作は正月の「ごまめ」。ぽっかりと空いた目がピカソの絵の目に例えられた。言われてみるとあの象徴的なシュールな目に思えてくる。二句目、この女性は正月の着物を自分で着付けている。おしまいに後ろ姿を鏡で確認して帯をボンとたたいて終了。あでやかさが伝わる。三句目、恐らくその年亡くなった人のこと。年賀状のリストから削除せねば。パソコンのキーで削除するつらさ。

選評

今井 聖 選

首に掛くる手袋の紐長すぎし
 (長野市) 田中 重雲

少しだけ損した気分着ぶくれて
 (坂城町) 中村すす美

我一人標的に雪尖りけり
 (佐久市) 真山 邦弘

賑やかに組合の注連飾りけり
 (千曲市) たしまたける

風邪貰ふ夫のやうやく癒ゆる頃
 (松本市) 辻 佳代

靴紐の真白きままに初詣
 (松本市) 伊藤 和夫

装ひも老人らしく初詣
 (松川村) 中野 重行

初日さす樺一樹の力瘤
 (伊那市) 中村 初治

七味屋へ衆生こそりて初詣
 (長野市) 武田 芽子

賀状来るすらの名前にルビつけて
 (佐久市) 佐藤 勝子

佳作

此の星に似ていて無疵電の玉
 (佐久市) 町田ゆかり

買初や妻の書ききたるメモ見つつ
 (飯綱町) 坂井 寿男

一句目、手袋を首に掛けるのは落とさないようにするためのから掛けているのは幼児かもしれない。紐の長さや背丈とのアンバランス。そのことが幼児らしさを演出する。発想、着眼、共に出色。二句目、着ぶくれていることがどうして「損をした気分」なのか。しかし言われてみるとそんな気がしてくる。読者の深層心理に触れているのだ。三句目、雪が刃物のように「我」を襲う。魔物のような雪だ。

選評

神野 紗希 選

書き初めの墨零るるやなるの国
 (神奈川県相模原市) 高田 祥聖

フォッサマグナ喰るかはたれ御神渡
 (小諸市) 加藤 陽介

ウエルテルの悩みか味噌煮か鍋焼か
 (長野市) 武田 芳子

美しき狐は老いて火となれり
 (松本市) 滝沢征矢子

ダモイの念五万余埋めし大地凍つ
 (中野市) 田川 寿男

百歳の姉の正月カチューシャよ
 (千曲市) 倉谷みつる

令和六年能登に新春なかりけり
 (箕輪町) 向山 政俊

湧水の砕け散りたる若菜籠
 (松本市) 伊藤 和夫

ひめ始俺は十月十日の子
 (中野市) 風間 陽介

最終回終へしドラマや餅を揚ぐ
 (長野市) 北沢 時江

佳作

雪もよい傾引き食品買う帰路
 (長野市) 青木 武明

ひとつそりと仕事始にカーネット
 (木島平村) みつも

一句目、書き初めの平穩を崩す脅威。黒々と零れた墨が、地震に遭った感情の生々しさを表現する。新年を襲った能登半島地震、被災地の一日も早い救済と復興を祈る。二句目、明け方の薄暗がり到大地の音を聞き留めた。御神渡の名に宿る自然への畏怖を思い出す。三句目、ゲーテの名作「若きウエルテルの悩み」に飾らない食の話題を接続させた。空腹を満たせば、恋の懊悩からも解放されるかも。

選評